三宅 仁

無駄とは何だろうか?~「無駄学」入門~

『無駄学』 西成活裕著/新潮選書

無駄とは何だろうか?工学では無駄のない最適化を教える。無駄は企業(特に製造業)にとっては天敵。ところが、工学はその天敵について全然研究してこなかった。この本はそれについて研究した成果の第1号。しかも、この原稿執筆時点のわずか2ヵ月前に出版されたばかり。一体工学は何を教えてきたのか?

著者はまず、無駄の定義から始める。これは工学の常道だろう。果たして無駄は定義できるか?著者は美事に定義し、「ムダ」と「むだ」と「無駄」の3つに分類する。諸君は定義できるだろうか?ひとつの答え(著者の答えでもある)は、最適でないものは無駄だということ。なーんだ、こんな簡単なことと思うか、それは再帰的自己定義だと思うか、詭弁だと思うか、どれだろうか?工学で最適を学んでいれば、無駄はすぐに分かるはず。それが取れない(「ムダとり」という表現を使う)のが現実。一体どうなっているのか?

トヨタの生産方式には2つの柱があり、ひとつは「自働化」であり、もうひとつは「ジャストインタイム」。この両者とも「ムダとり」のかたまりだという。「ムダとり」には長い歴史があった。現場の科学(本学でいう「技学」)の重要性の真骨頂だろう。

さらに、工学・技術の世界のみならず、広く社会一般には無駄が多い。地球温暖化での議論では必ず空調の無駄が議論される。また、さんざん外国から食糧を輸入し、それを大量に食べ残して捨てているのが我が国でもある。以前、ある学会での大御所の先生の講演で、たらふく食べて太ったお腹をへこますため、お腹に回したベルトを洗濯機の軸につなげた自動洗濯機の絵を示し、自分の手で洗うこととどちらがよいかというお話があった。話を端折るが、著者によれば、資本主義経済における利子も無駄ということになる。この結論は、著者を高名にした前著、『渋滞学』からの導出のようだ。

実は、ここでは『渋滞学』を紹介しようと考えていたところだが、本書が出たため、急遽こちらを選んだ。実際のところ、本書は数年の蓄積のようだが、『渋滞学』は10年以上の蓄積によるものであり、多くの出版賞を受賞した名著なので是非ともこちらも読んで貰いたい。渋滞は物理現象と社会現象の美事な一致。またその応用も幅広く、理学・工学が広く社会現象を解明する手段となりうることを

示している。

さて、究極の無駄はなんだろうか?無為な時間を過ごすことだろうか?その主体である我々自身の存在か?聞いていないが、CD「ムダとりの歌」(著者歌唱)というのも発売されているそうだ。これはさすがに無駄に思えるが…。



三宅 仁

経営情報系教授。学校医。専門領域は、医用福祉工学、医療情報学、大学保健 管理。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『無駄学』西成活裕著 新潮社 2008年 1,050円 『渋滞学』西成活裕著 新潮社 2006年 1,260円

ブックガイド目次へ